

“英文法式の叱り方” —— 内村と英語

内村鑑三(1861-1930)¹は日本の先駆的プロテスタント・クリスチャンであり、近代日本の代表的思想家であるとともに、すぐれた英文家のひとりであった。著名な英学者市河三喜は、“殊に日本の文化史上に名を残した程の人で、英文家といわれる人は、といえ先ず内村鑑三、新渡戸稲造、岡倉天心の三氏を推すに誰も異議はなからう”²と言っている²

ここに内村がいかに深く英語に親しんでいたかを示す一つのエピソードがある。彼のもとに住みこんでいたひとりの若い弟子が、真夏のある日、西陽のひどくさし込む部屋で昼寝をしていたところ、向いの母屋から声をかけられて、内村からこう叱られたという。

陽がそんなに照りつけているのに、なぜそのすだれを下げぬ。君のコンモンセンスが、そのすだれをおろすことを君に命じないのか！これをその弟子は“英文法式の叱り方”として、なつかしく思い起している。³

内村が初めて英語に接したのは、彼が12歳のとき(1872、明治5年)高崎藩の英学校においてであった。この翌年には切支丹の禁制が撤廃されているから、内村はまさに近代日本の夜明けとともに英語を習い始めたのである。その後有馬英学校を経て大学予備門(東京大学の前身)に進み、その上級クラスでは外人教師M・M・スコットから“スコット・メソッド”⁴と呼ばれるすぐれた教授法によって英語を学び、彼の英語力とくに作文力はとみに増大した。

1877年、17歳の秋、内村は北海道開拓使の募集に応じて、札幌農学校(北海道大学の前身)に第二期生として入学した。“Boys, be ambitious!”の名言をもって知られる教頭W・S・クラークはすでに去っていたが、第一期生たちの感化によって彼はここで初めてキリスト教に接した。農学校では多くの外人教師から英語で講義を聞き、英語でレポートや試験の答案を書き、英語で討論やス

ピーチをするなど、徹底した英語教育を受けたのであった。大学予備門に入ってからここを卒業するまでの数年間は、学業もちろんのこと、日常生活の大半もすべて英語であったものと思われる。

その後内村は、24歳から28歳にかけての4年間(1884~88、明治17~21年)アメリカに留学した。主としてニュー・イングランドのアマスト大学に学び、理学士の称号を得て卒業した。在学中に、総理J・H・シーリーの感化によって回心を経験し、福音信仰を得て歓喜した。アメリカ滞在中の生活については、彼の“*How I become a Christian*”などに生々と描かれているが、言葉で苦労したというようなことは全く語られていないので、恐らく内村の英語は留学前すでに充分実用に耐えるものであったのであろう。在米中に“*Moral Traits of the Yamato-damashii*(大和魂の道徳的特質)”⁵その他2・3の英文を綴って、雑誌などに寄稿している。

帰国した内村は教育およびジャーナリズムに携わったのち、1900(明治33)年に月刊キリスト教伝道雑誌“*聖書之研究*”を創刊、以後1930(昭和5)年70歳で永眠するまで、日曜日の聖書研究会と、等身大と言われるぼう大な著述とを通して、彼のライフワークであったキリスト教の伝道にその生涯を捧げた。

この間英文の著作に関して言えば、こんにちすでにキリスト教文学の古典とされている、内村の信仰自叙伝“*How I become a Christian*(余はいかにしてキリスト信徒となりしか)”⁶も、西郷隆盛、日蓮ら5人の代表的日本人を論じて、日本の精神的価値を世界に向って立証しようとした“*Representative Men of Japan*(代表的日本人)”⁶の二著のほか、ジャーナリストとしては日刊紙“*万朝報*”英文欄主筆として預言的社会評論の健筆をふるい、“*聖書之研究*”誌には1913(大正2)年3月以降1930年3月の最終号に至るまで、17年間の長きにわたって毎号欠かさず巻頭に英和



1928年（昭和3年68才）5月東京にて

両文の短い信仰所感文を掲げた。⁷ その一部を編集して一書とした“Alone with God and me（英和独語集）”を読んだあるドイツ人は、“この書を読むは、バッハの音楽を聞くようであった”と感嘆したという。⁸ また晩年の1926～28（大正15～昭和3）年には、自ら主筆となって“Japan Christian Intelligencer”⁹ という月刊英文雑誌を発行した。そのほか“愛吟”¹⁰ と称する内村独特の訳詩集もある。

“余はいかにして”から“インテリジェンサー”までを通読するとき、人はそこに内村の人と信仰の全貌を見わたすことができるであろう。と同時に英文を通して表現された内村の思想と、彼の英文そのものの成熟の軌跡をも見てとることができるであろう。

内村は以上のような著述にとどまらず、若い時には英語で日記をつけ¹¹、外国人にはもちろん日本人の友人に対してもよく英文で手紙を書いた。

¹² また英字新聞や英文雑誌に寄稿、投稿することもしばしばであった。とくに札幌農学校時代の旧友たちとは、晩年になっても共に集まるときには英語の聖書を朗読し、英語で祈りをささげるのが常であったという。そのひとり宮部金吾は“心中の情緒や思想を最もよく言い現わすには、英文に限ると私共は思つて居た”と語っている。¹³

こうして内村は生涯にわたって英語を離れることがなかった。“英文法式の叱り方”をしてしま

うほどに、英語で感じ、英語で考え、英語で書き、英語で語った。とくに内に溢れるもの、深い感動や強い感動などを表現するには、どうしても英語によらざるをえなかったほどに、英語の人であった。（つづく）

<注>

- 1 内村の没後50年を記念して現在岩波書店から“内村鑑三全集”全38巻が刊行中である。このほか入手容易なものとして教文館版“内村鑑三全集”全57巻（教文館 1960～73）がある。このうち7巻は“英文著作全集”となっていて、主な英文著作および論文が収録されている。本稿の引用は大体においてこの教文館版全集によった。
- 2 “日本の英学 100 年明治編”（研究社1968）P.74。
- 3 石原兵永“身近に接した内村鑑三”（山本書店1971）P.129。
- 4 教文館版“内村鑑三信仰著作全集”第20巻（以下、“信・20”のように略す）P.78。
- 5 1893年11月脱稿。1895（明治28）年、日米両国で出版されたのち、ドイツ語、フィンランド語、スウェーデン語、デンマーク語、フランス語などに訳出された。鈴木俊郎訳（岩波書店1938）はじめ、数種の日本語訳がある。
- 6 はじめ“Japan and Japanese（日本及び日本人）”の題で出版され（1894年）、のちこの書名に改められた（1908、明治41年）。
- 7 ほぼ200篇にのぼる。このうち最初の9年間の大部分を集めて出版したのが“Alone with God and Me”である（岩波書店1922）。
- 8 教文館版“内村鑑三日記書簡全集”第3巻P.293。
- 9 教文館版“内村鑑三英文著作全集”第4巻（以下“英・4”のように略す）にまとめられている。
- 10 “Favorite Singing”。内村が若いころから愛誦していた英詩に、自ら訳をつけて編集し

たもの（1897、明治30年）。内村は自分の訳を精神訳と呼んだ。

- 11 これがもとになって “How I become a Christian” が成った。この著の副題は “Out of my diary（わが日記より）”。
- 12 代表的なものはD・C・ベルおよび宮部金吾あての手紙である。山本泰次郎 “内村鑑三—信仰・生涯・友情”（東海大学出版会1966）参照。
- 13 同上書 P.661

（所載）「YMCA English Quarterly」No.13
1982年 日本YMCA同盟